様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２８ 日現在

機関番号：３４３０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2022
課題番号：１７Ｋ０２９０６

研究課題名（和文）優れた外国語授業創出のためのネイティブ／ノンネイティブ教員の連携・協働

研究課題名（英文）Collaboration and Cooperation of Native Spealers Teachers and Not-Native Speakers Teachers to create an Excellent Foreign Language Class

研究代表者
中川　良雄（Nakagawa, Yoshio）

京都外国語大学・外国語学部・教授

研究者番号：３０２６１０４３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究では、超言語的な観点から、外国語教育一般に共通する概念を抽出した。学習言語が何であれ、様々な地域で学ばれる言語を問わず、外国語教師として求められる資質や能力には共通性がある。
　ノンネイティブ教師には、自らが学習者であったことから、学習者と価値観や文化を共有し、習得が困難なことと容易なことを熟知している。つまり学習者にとっては、ロールモデルとして、教員からの授業やアドバイスを享受する。一方でネイティブ教師には、目標言語でのコミュニケーションを可能にしてくれる役割が求められる。母語話者であるがゆえ、カルチャーモデルとして、目標文化の伝授者・紹介者となることが期待されている。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究では、学習者の国籍や目標言語、背景文化等により、アンケート、インタビュー結果の異なるであろうことが予想されるが、そこに研究意義が見出され、個別性と共通性（一般性）を探ることにより、「優れた外国語授業」の概念化が図れるものと考える。
　本研究の知見は、外国語教育におけるネイティブ／ノンネイティブ教員の役割について、新たな視点を投げかけるばかりか、外国語教育に一般化された教員養成のあり方に有益な示唆を与えるものとなる。

研究成果の概要（英文）：　The main purpose of this research is to work out ways to inquire about qualities and abilities that native speaker teachers (NST) / non-native speaker teachers (NNST) are to be equipped with for the sake of developing excellent foreign language classes as well as to search for good ways for NSTs and NNSTs to collaborate and cooperate with each other.
　The author believes that it is possible to conceptualize “excellent foreign language classes” by delving into the linguistic individuality and the pedagogical commonality (universality) via our survey results as to what the teachers’ roles are and what qualities and abilities the learners expect of NSTs and NNSTs. If we can find out what the teachers are expected of, then the findings will not only help to facilitate teacher-training but also to improve the necessary qualities and abilities for good teachers.

研究分野：外国語教育

キーワード：ネイティブ教員　ノンネイティブ教員　資質・能力　連携・協働　役割分担

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

## １．研究開始当初の背景

昨今の言語教育では、従来の文法訳読法やオーディオ・リンガル教授法からコミュニケーション重視の教授法、教師主導型から学習者主体型の教育メソッドへと移行しつつある。またネイティブ教員を積極的に活用し、学習者のコミュニケーション能力を向上させるための工夫もなされつつある。それと同時に、教員に求められる資質や能力も、変化してきている。

研究代表者はこれまでに、科学研究費補助金による研究や個人研究を通じて、日本語教員に求められる資質や能力、「優れた」日本語授業のあり方や教室活動の進め方等について、議論を重ねてきた。

ここで次のような疑問が浮かび上がる。

これまでの知見は、はたして日本語教育に特化したものか。日本語教育、英語教育、中国語教育やフランス語教育といった、それぞれの領域の殻に閉じ籠るのではなく、「外国語教育」という共通した概念のもとで議論することはできないか。またそれぞれの領域で蓄積されている知見を交換し、共通財産として、「外国語教育」の進展に活かしていくことはできないか。外国語教員として求められる資質や能力は、それぞれの言語の個別性と外国語教育という共通性（一般性）のもとで議論することができるのではないか。

本研究は、「優れた外国語授業」創出のための、ネイティブ／ノンネイティブ教員に求められる資質・能力を問い、両者の連携・協働のあり方を模索することを主目的とするが、学習者の国籍、目標言語、価値観・人生観、背景文化やニーズを抜きにした議論は考え難い。

そのため本研究では、教員の役割分担やネイティブ／ノンネイティブ教員、そして学習者が期待するもの、教員自身の資質や能力について問うアンケート、インタビューを基礎資料とする。

学習者の国籍や目標言語、背景文化等により、アンケート、インタビュー結果の異なるであろうことが予想されるが、そこに研究意義が見出され、個別性と共通性（一般性）を探ることにより、「優れた外国語授業」の概念化が図れるものと考える。

## ２．研究の目的

「優れた外国語授業」創出のための、ネイティブ／ノンネイティブ教員に求められる資質・能力を問い、両者の連携・協働のあり方、役割分担を模索することを主目的とする。

## ３．研究の方法

教員の役割分担やネイティブ／ノンネイティブ教員、そして学習者が期待するもの、教員自身の資質や能力について問うアンケート（統計処理）、インタビュー調査（M-GTA による分析）を基礎資料とする。

## ４．研究成果

本交付期間中に実施した調査研究のうち、代表的なものを以下に概述する。

（1）ネイティブ／ノンネイティブ教員に求められる資質・能力と連携・協働のあり方」に関するアンケート調査（海外の日本語学習者対象）

本研究を貫く立ち位置は、超言語的な観点から、外国語教育一般に共通する概念を抽出することである。中国語や英語、フランス語といった個別言語を問わず、また様々な地域で学ばれる言語を問わず、外国語教員として求められる資質や能力には共通性があることを仮説として論を進めてきた。

ノンネイティブ教員には、自らが学習者であったことから、学習者と価値観や文化を共有し、

習得が困難なことと容易なことを熟知している。つまり学習者にとっては、ロールモデルとして、教員からの授業やアドバイスを享受する。

一方でネイティブ教員には、目標言語でのコミュニケーションを可能にしてくれる役割が求められる。母語話者であるがゆえ、カルチャーモデルとして、目標文化の伝授者・紹介者となる。

このような資質や能力を備えたネイティブ／ノンネイティブ教師の連携・協働により、「優れた外国語授業」が創出されるものと考えられる。

今回抽出した、「人間性」「専門性」「ファシリテイター」等は、ネイティウ／ノンネイティブを問わず、また目標言語が何であれ、外国語教員に共通して求められる資質や能力であろう。

海外の日本語学習者が求めるネイティブ／ノンネイティブ教師の資質・能力は、決してネイティブ／ノンネイティブ各々に特化したものではなく、両者に共通の資質・能力、はたまた外国語教育に一般化された理念として捉えられる。

今回抽出した、「人間性」「専門性」「ファシリテイター」等は、ネイティブ／ノンネイティブを問わず、また目標言語を問わず外国語教師に共通して求められる資質や能力であろう。

(2)「日本の外国語教育において、ネイティブ／ノンネイティブ教員に期待されるもの」についての調査（京都外国語大学学生を対象とした調査）

京都外国語大学外国語学部学生へのインタビュー調査と M-GTA による分析を行った。

京都外国語大学外国語学部の学生が大学を志願してくる理由は様々である。ある者は、帰国子女であったり、中国からの帰国者（三世）であったり、大学入学前に海外（対象国）に滞在した経験があるなどの「必然的動機」から目標言語については多かれ少なかれ知識を有するものの、基礎から体系的に学びたいとの理由を持つ。また環境問題、サッカーや漫画など、「趣味・興味」から当該文化や言語についての知識を深めたいと志望してくる学生もいる。

動機はどのようなものであれ、ネイティブ／ノンネイティブ教員の授業を通じて、「やさしく丁寧に教えてくださる」「教師との触れ合い」は、志願時の「期待値」とさほど違えることなく、「教師の人間性」に触れることは、学生の動機づけを一層強化する。

では「授業」ではどんなことが起こっているのか。まずネイティブ教師とノンネイティブ教員が授業を分担することになるが、ネイティブ教員は会話を担当し、ノンネイティブ教員は文法を担当するのが通例となっている。ノンネイティブ教員には、ただ授業を担当するだけではなく、授業カリキュラムの案配に加えて、学生の進路・進級相談や学修相談など、「コーディネイター」としての役務が課せられる。学生と母語を同じくするノンネイティブ教師が役務を担うことで、学生に安心感を与える。

上記のごとく、ネイティブ教員は会話やプレゼンテーション、ライティングの授業を、ノンネイティブ教員は文法導入や文化知識を受け持つところに「教師の専門性」が発揮できる。

目標言語が話される言語圏の「文化情報」を与えることで、学生は刺激を受け、目標言語圏に対する興味を深める。学生と同じ目線で情報提供できるノンネイティブ教員が役務を負うことが多い。

ネイティブ教員とノンネイティブ教員の役割は、厳密に区別されているわけではなく、両者は「連携」し、それぞれの役務を果たしていくことを学生は期待している。

上記「文化情報」の提供や教員の経験談などに学生は耳を傾け、そうした関連情報こそが「動機づけ」に繋がる。

ノンネイティブ教員は、学生のいわば先輩であり、経験談や失敗談、学習法などの提供が学生の動機を喚起する。ノンネイティブ教員は、学生の指標や努力目標としての「ロールモデル」となる。

このような授業内でのネイティブ／ノンネイティブ教員の授業技能は、決してそれぞれが単独で実行されているのではなく、それぞれが有機的に結びつき、「優れた授業」創出のための授業技能として、教員により絶えず改善が加えられていくべきものである。

では初習言語の学生にとって、教室内で使用される「媒介語」はいかにあるべきか。ネイティブ教員の多くは日本語を解し、日本語による説明や指示も行なわれているようであるが、学生が求めるのは、ネイティブ教員には目標言語での授業である。そこで学生の学習段階に応じて語彙や表現、スピードなどを調整していく、「ティーチャートーク」である。ネイティブ教員には是非とも獲得してほしい授業技能である。

学生は、ネイティブ教員から様々な「異文化」を学ぶ。教室内でのネイティブ教員の言動は、時に「カルチャーショック」を受けるが、決して嫌悪を感じるのではなく、目標文化として捉え、言語や文化について学びを深める格好の教材、いわば「カルチャーモデル」となる。

ネイティブ教員には、ネイティブ教員ならではのものの見方や考え方があり、ネイティブでなければ分からないことも多々存在する。ネイティブ教員が「ネイティブ性」をなくしてしまえば、ネイティブ／ノンネイティブ教員の連携・協働は意味をなさなくなってしまうばかりか、言語教育の目的すらなくなってしまう。

このようにしてネイティブ／ノンネイティブ教員から、単に言語知識を獲得するのみならず、言語運用能力を獲得した学生は、ただ言語を使う役務に準ずるのではなく、新たな世界観、すなわち「グローバルマインド」を身に付け、言語を武器としてグローバルに活躍していくことが期待されている。

入学動機として掲げられた志が、ネイティブ／ノンネイティブ教員からの学びを通して、「学習成果」を上げ、目標達成のために成長を遂げていく。

(3)「ネイティブ／ノンネイティブ教員の連携・協働―コロナ禍において連携・協働は可能かー」（中国の日本語教員対象インタビュー調査）

新型コロナウイルスの感染拡大は、我々の日常生活を奪ったばかりか、教育界にも甚大な影響をもたらした。我々が関わる日本語教育の分野でも、日本国内においては、日本政府の海外からの入国制限による学習者の数的減少、海外においては、ネイティブ日本人教員の日本帰国など、影響は枚挙にいとまがない。

本研究では、コロナ禍におけるネイティブ／ノンネイティブ教員の連携・協働のあり方について、中国のノンネイティブ教員から現状を聞くことができた。インタビューを M-GTA を用いて分析し、その結果、15 の概念を生成することができた。それらをストーリーラインとして以下にまとめる。

外国語教育は、ネイティブ教員とノンネイティブ教員が連携・協働し、初めて「優れた」授業の創出が可能となる。中国の日本語教育においても、従来より多くのネイティブ日本人教員が中国へ派遣され、ノンネイティブ中国人教員と連携・協働を進めてきた。

日本人教員の多くは、「会話」「精読」「作文」といった授業を担当する。

しかしコロナウイルスの難を逃れるため、多くの日本人教員が日本へ帰国した。日本からオンラインで遠隔授業が継続されている場合もあるが、「ネイティブ不在」のまま授業が継続されているケースも多い。

ではその日本人教員が抜けた穴は、だれがどうやって埋めるのか。中国人教員が役割を変更するのも一手であるが、その場合、中国人教員には、相当な日本語力が求められる。またすでに持ちコマが手いっぱいで、負担を強いられないのも事実である。

授業内容だけなら交代が利くとしても、これまでネイティブ日本人が担ってきた「ネイティブ

性」の発動はどうなるのか。日本人教員には、「ランゲージモデル」としての役割があるはずで、正しいアクセントや文法で話したり、文法の正誤性を判断したりする母語話者ならではの役目がある。

日本人教員のほとんどは、中国語を解さない。中国滞在が長くなると、中国語能力に長けてきて、授業で中国語を使うこともあるだろうが、日本人教員には「媒介語」として日本語を使用することが好ましい。中国人教員も、授業で日本語を使用するが、学生の理解が得にくい場合には中国語を使用する。教員にはティーチャートークの技法が求められるが、ネイティブにしろ、「良質のインプットが、良質のアウトプットにつながる」という観点からは、媒介語として使用する日本語の質を問われることになる。

日本人教員の役割は、言語について教えるだけではなく、言葉の裏に潜む日本人のものの見方や考え方を伝えることである。「ネイティブ性」の発動は、ネイティブ日本人にしか適わない。

一方でノンネイティブ中国人教員にも、求められる資質や能力がある。ノンネイティブ教員には、自分が学習者であったことから、「経験知」として学習上の困難点を察知したり、文法上の誤りを予測したりすることができる。媒介語として日本語を使用するにせよ、学生の理解を得るためには、この限りではない。

両者がともに教材を開発したり、同一テキストを使用した役割分担（文法／導入／会話・・・）したりといった「教育連携」も、積極的には行われていない。ノンネイティブ中国人教員とネイティブ日本人教員の持つ「ランゲージモデル」や「ネイティブ性」を活かして連携・協働を進めていけば、教材開発やシラバス、カリキュラム作成に益することが多いはずである。

キャンパス内に日本人教員がいたころには、学生は、教室内外での日本人教員との接触から生の日本語に触れ、身に付けた日本語を試す機会を与えられていた。「ネイティブ不在」となってしまっては、教員と「学生との交流」の場が失せてしまった。

ノンネイティブ中国人教員にとっても、日本人教員に質問したり、雑談をしたりして、自身の日本語をブラッシュアップする「教師間交流」の場もなくなってしまった。

多くの大学では、日本の大学と国際交流協定を結び、日中双方の「学生間交流」が大なり小なり実施されているはずであるが、交流がストップしてしまっては、学生の動機づけが減退してしまわないか心配される。

言葉を学ぶ目的は、文法や表現を学び、コミュニケーション能力を身に付けると同時に、その言葉の裏に潜む「文化」に触れることである。ネイティブ日本人教員が「カルチャーモデル」として果たす役割は大きい。「ネイティブ不在」となり、はたして文化の伝導は可能なのか。「ネイティブ不在」は、「人間不在」ともなり、ロボットからものを学ぶのとまったくもって変わらなくなってしまう。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計13件（うち査読付論文　7件／うち国際共著　2件／うちオープンアクセス　5件）

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>中川良雄 | ４．巻<br>28 |
| ２．論文標題<br>海外で求められるネイティブ／ノンネイティブ日本語教師の資質・能力と連携・協働のあり方 | ５．発行年<br>2021年 |
| ３．雑誌名<br>日本語・日本文化研究 | ６．最初と最後の頁<br>1-12 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>中川良雄 | ４．巻<br>27 |
| ２．論文標題<br>国の日本語教育におけるネイティブ／ノンネイティブ教員の資質・能力と日本語学習者の学び―M-GTAによるインタビューの分析―」 | ５．発行年<br>2020年 |
| ３．雑誌名<br>日本語・日本文化研究 | ６．最初と最後の頁<br>1-27 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>中川良雄・小西達也・岡林花波 | ４．巻<br>28 |
| ２．論文標題<br>ベトナム人日本語学習者が考える「いい授業」 | ５．発行年<br>2021年 |
| ３．雑誌名<br>無差 | ６．最初と最後の頁<br>1-12 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>該当する |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>中川良雄 | ４．巻<br>26 |
| ２．論文標題<br>ベトナム人日本語学習者が求めるネイティブ／ノンネイティブ教員の資質・能力と連携・協働による「優れた」日本語授業 | ５．発行年<br>2019年 |
| ３．雑誌名<br>日本語・日本文化研究 | ６．最初と最後の頁<br>1-12 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>中川良雄 | 4．巻<br>27 |
| 2．論文標題<br>海外で求められるネイティブ／ノンネイティブ日本語教師の資質・能力と「優れた」日本語授業 | 5．発行年<br>2020年 |
| 3．雑誌名<br>無差 | 6．最初と最後の頁<br>17-35 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>中川良雄、王尤 | 4．巻<br>第五輯 |
| 2．論文標題<br>中国人日本語学習者が求める母語話者／非母語話者教師の資質・能力 | 5．発行年<br>2018年 |
| 3．雑誌名<br>日本語言文化研究 | 6．最初と最後の頁<br>59-66 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>該当する |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>中川良雄、橋本政義、舟杉真一 | 4．巻<br>91 |
| 2．論文標題<br>ネイティブ／ノンネイティブ教員の連携・協働と役割分担―フランス語学科とドイツ語学科の学生が考える教員の資質・能力 | 5．発行年<br>2018年 |
| 3．雑誌名<br>研究論叢 | 6．最初と最後の頁<br>49-60 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>中川良雄 | 4．巻<br>- |
| 2．論文標題<br>ネイティブ／ノンネイティブ教員の役割分担と連携・協働の可能性を問う | 5．発行年<br>2018年 |
| 3．雑誌名<br>グローバル化時代における日本語教育と日本研究 | 6．最初と最後の頁<br>252-263 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>中川良雄 | 4．巻<br>92 |
| 2．論文標題<br>韓国の日本語学習者が求めるネイティブ／ノンネイティブ教員の資質・能力と役割 | 5．発行年<br>2019年 |
| 3．雑誌名<br>研究論叢 | 6．最初と最後の頁<br>87-97 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>中川良雄 | 4．巻<br>25 |
| 2．論文標題<br>ネイティブ／ノンネイティブ教員に求められる資質・能力と連携・協働の可能性―中国と韓国を例としてー | 5．発行年<br>2019年 |
| 3．雑誌名<br>日本語・日本文化研究 | 6．最初と最後の頁<br>11-22 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>中川良雄 | 4．巻<br>80 |
| 2．論文標題<br>日本語教師の教室活動を問う | 5．発行年<br>2017年 |
| 3．雑誌名<br>研究論叢 | 6．最初と最後の頁<br>53-66 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>中川良雄 | 4．巻<br>1 |
| 2．論文標題<br>日本語教師の教室活動を問う | 5．発行年<br>2017年 |
| 3．雑誌名<br>日本語教育与日本学研究 | 6．最初と最後の頁<br>10-16 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>中川良雄・岡本俊裕・倉田誠 | ４．巻<br>90 |
| ２．論文標題<br>ネイティブ／ノンネイティブ教員に求めれれる資質・能力―中国語学科と英米語学科の学生が求める資質・能力― | ５．発行年<br>2018年 |
| ３．雑誌名<br>研究論叢 | ６．最初と最後の頁<br>141-153 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

〔学会発表〕　計13件（うち招待講演　0件／うち国際学会　10件）

| |
|---|
| １．発表者名<br>中川良雄 |
| ２．発表標題<br>中国の日本語学習者が求める母語話者／非母語話者教師の資質・能力と学習者の学び |
| ３．学会等名<br>東アジア日本学研究学会第三回国際シンポジウム（国際学会） |
| ４．発表年<br>2021年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>中川良雄 |
| ２．発表標題<br>中国と韓国の日本語教員に求められる資質・能力 ―ネイティブ／ノンネイティブ教員の連携・協働による「優れた」日本語授業の創出― |
| ３．学会等名<br>韓国日語日文学会2020年冬季国際学術学会 |
| ４．発表年<br>2020年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>中川良雄 |
| ２．発表標題<br>韓国の日本語学習者が求めるネイティブ／ノンネイティブ教員の資質・能力と連携・協働のあり方 |
| ３．学会等名<br>2020年度日本総合学術学会秋季大会（国際学会） |
| ４．発表年<br>2020年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>中川良雄 |
| ２．発表標題<br>外国語授業で求められるネイティブ／ノンネイティブ教員の資質・能力と連携・協働のあり方 |
| ３．学会等名<br>第8回国際言語文化学会 |
| ４．発表年<br>2021年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>中川良雄 |
| ２．発表標題<br>ネイティブ／ノンネイティブ教員に求められる資質・能力と連携・協働による「優れた」日本語授業　―中国と韓国の学習者が求める日本語授業― |
| ３．学会等名<br>第六回中日韓朝言語文化比較研究国際シンポジウム（国際学会） |
| ４．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>中川良雄 |
| ２．発表標題<br>中国の日本語教育で求められる母語話者／非母語話者教師の資質・能力と「優れた日本語授業」創出のための連携・協働 |
| ３．学会等名<br>2019年度中国日語教学研究会年会及び国際シンポジウム（国際学会） |
| ４．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>中川良雄 |
| ２．発表標題<br>ベトナムの日本語学習者が求めるネイティブ／ノンネイティブ教師の資質・能力と連携・協働による「優れた」日本語授業の創出 |
| ３．学会等名<br>言語文化教育研究学会国際研究集会（国際学会） |
| ４．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>中川良雄、森末浩之、小川京子、タオティカーミー、鈴木茜 |
| ２．発表標題<br>垣根を越えたつながりが生み出す日本語教育の未来 |
| ３．学会等名<br>言語文化教育研究学会国際研究集会（国際学会） |
| ４．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>中川良雄 |
| ２．発表標題<br>ネイティブ／ノンネイティブ教員の役割分担と連携・協働の可能性を問う |
| ３．学会等名<br>ハノイ大学2018年国際シンポジウム「グローバル化時代の日本語研究と日本研究（ベトナム・ハノイ）（国際学会） |
| ４．発表年<br>2018年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>中川良雄 |
| ２．発表標題<br>母語話者／非母語話者教員に求められる資質・能力と連携・協働の可能性―中国と韓国を例としてー |
| ３．学会等名<br>アジア・アフリカ研究の視野における日本学国際シンポジウム（中国・上海）（国際学会） |
| ４．発表年<br>2018年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>中川良雄・岡本俊裕・倉田誠 |
| ２．発表標題<br>ネイティブ／ノンネイティブ教員に何を求めるかー英米語学科と中国語学科の学生が求める外国語授業― |
| ３．学会等名<br>第5回国際言語文化学会 |
| ４．発表年<br>2017年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>中川良雄・王尤 |
| ２．発表標題<br>中国人日本語学習者が求める母語話者／非母語話者教師の資質・能力 |
| ３．学会等名<br>第5回日中韓朝言語文化比較研究国際シンポジウム（国際学会） |
| ４．発表年<br>2017年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>中川良雄・伝馬理恵・上野山愛弥 |
| ２．発表標題<br>母語話者／非母語話者の連携・協働による「優れた」外国語授業 |
| ３．学会等名<br>第３回「日本語教育学の理論と実践をつなぐ」国際シンポジウム（国際学会） |
| ４．発表年<br>2018年 |

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

| | 氏名<br>（ローマ字氏名）<br>（研究者番号） | 所属研究機関・部局・職<br>（機関番号） | 備考 |
|---|---|---|---|
| 研究分担者 | 橋本　政義<br>(Hashimoto Masayoshi)<br>(00771007) | 京都外国語大学・外国語学部・教授<br>(34302) | |
| 研究分担者 | 舟杉　真一<br>(Funasugi Shinichi)<br>(40411003) | 京都外国語大学・外国語学部・教授<br>(34302) | |
| 研究分担者 | 倉田　誠<br>(Kurata Makoto)<br>(80241157) | 京都外国語大学・外国語学部・教授<br>(34302) | |

６．研究組織（つづき）

| | 氏名<br>（ローマ字氏名）<br>（研究者番号） | 所属研究機関・部局・職<br>（機関番号） | 備考 |
|---|---|---|---|
| 研究分担者 | 岡本　俊裕<br>(Okamoto Toshihiro)<br>(80373083) | 京都外国語大学・外国語学部・教授<br>(34302) | |

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---|---|